

5・6世紀の西ローマ地域は、帝国の統治機構の停滞や、ゲルマン諸部族の国家建設などにより、根本的な構造転換を経験した。この地域に属するガリア特有の現象とみなされているのが、セナトル貴族の司教職進出である。セナトル貴族とは、同時代のガリアを主導した、ローマ系の最上位層の人々である。彼らは、帝国や領土といった観念にとどまらず、行政や経済、文芸など、あらゆる事物に及ぶ「ローマ」の担い手たることを自覚していた。他方で、西ローマ政府のイタリア重視政策の過程で、事実上放棄されたガリアへの帰属意識をも有していた。司教職への就任は、帝国官職への就任、ゲルマン諸部族国家への奉仕、独力での勢力形成といった、彼らが選択しえた他の選択肢に比して、相対的に安泰とみなされた。そのため、彼らの社会的地位を維持するうえで、有力なものとして浮上した。そこでセナトル貴族は、ガリア各地の司教座を独占し、各自の門閥のなかでその地位を継承していった。

こうした現象を検討するために用いられたのが、「司教支配」という概念である。これは、カロリング期フランク王国において、支配の担い手として台頭したガリア司教の地位を表現するために、ドイツ学界において生み出されたモデルである。この体制が段階的に形成されていったことを実証するために、このモデルが5・6世紀まで遡って適用されたのである。その際の主要な論点は、西ローマ、フランクといった中央機関との関係のなかで、司教が自身の権力をいかにして確立したかというものであった。この点に関して、対立する二つの見解の間で論争が展開されてきた。一つは「委譲」論で、司教が中央機関から権力を「委譲」されて、その代理人として存在したとするものである。いま一つは「篡奪」論で、司教が中央機関の不在に乗じて権力を「篡奪」し、支配の担い手となったとするものである。両論はそれぞれ、ローマ的行政機構の「連続」と「断絶」をめぐる論争とも密接に関係していた。すなわち、「連続」論では、帝国の中心が東部へと移行して以来、司教が支配の担い手としての機能を漸進的に付与されたことが、ローマの統治機構存続の要因となったとみなされた。他方「断絶」論では、ローマの行政機構が動揺し、権力の空白状態が生じるなか、司教が諸勢力間の仲介者として活動したと想定する。その結果彼らは、都市の保護を担うこととなり、諸権力を獲得したというのである。この論争のなかで、ガリア司教は、都市において、中央機関に代わる「公的」な存在とみなされることとなった。

こうした「司教支配」論にたいする批判的な検討が、近年さかんに行われている。その主要な根拠となっているのが、5・6世紀ガリア諸都市における、都市のエリート層や、帝国政府から派遣された役人といった、司教以外の影響力を有する人々の存在である。彼らは頻繁に、司教との協力、対立関係を結んでいた。こうした点から、ガリア司教は、都市の代表者としての地位を確立していたわけではなかったと考えられるようになってきているのである。

このような「司教支配」の再検討は、「支配」の根拠となる権力を、中央機関との関係か

ら必然的に生じるものと解釈せずに、幅広く周辺の状況をふまえて評価する必要があることを示唆している。その際、5・6世紀ガリアにおいて、司教がいかにして権力を構築し、発展させたかが問われることになる。そこで本論文は、諸事象の分析から、5・6世紀ガリア司教の権力の成立、展開の様相を検討することを目的とする。

まず検討するのは、5・6世紀ガリアにおける司教選出の規定と実態の問題である。同時期のガリアの司教選出は、ローマの行政区分のキウィタスに該当する司教座都市の信徒や聖職者に加え、やはりローマの行政区分の属州に該当する首都司教管区を同じくする司教や、ガリアの有力者、ゲルマン諸部族も関与しており、都市の枠組みをこえた、諸勢力間の交渉の所産としての性格を有するものであった。そのため、司教が、諸勢力との関係のなかで、自身の基盤を築いた過程を解明する有効な事象であるといえる。

まず、5世紀ガリアにおける司教選出について検討する。同時期のセナトール貴族は、西ローマ政府との懸隔が明確になるなかで、自己を存立させるための手段として、相互の関係によるネットワークを形成した。そうしたネットワークには、以下の二つが存在した。一つは、カンヌ沖合の小島に建設されたレランス修道院の出身者たちが、ガリア南部、南東部の司教座に進出して形成されたネットワークである。いま一つは、ガリア中部のオーヴェルニュ地方を中心としたセナトール門閥間の関係が、構成員たちの司教座進出により、司教間ネットワークに変化したものである。これらのネットワークごとに開催された教会会議は、司教たちの合意形成の場としての機能を果たしていた。そこで定められた、司教選出に関する規定は、同一首都司教管内の複数の司教による選出を明記している。これは、ネットワークを重視する司教たちの姿勢を反映していると考えられる。

他方で、信徒や聖職者にあたる都市民は、伝統的に司教選出の主体であったが、4世紀以降、情勢の不安定化に伴い司教選出が難航し、他都市の司教への協力を要請せざるをえない状況に直面していた。また司教も、出身地と、就任した司教座が異なることが多く、必ずしも当地での支持基盤を有しているわけではなかったため、都市民の承認を得ることを重視した。司教選出に関する規定も、司教と都市民双方の権限を明示しており、両者の利害が一致したという状況を示唆している。

こうした条文の内容を確認しうる事例が、470年頃に行われたブルジュ首都司教の選出である。前任者の死亡を受けて、管区司教と都市民によって始められた後継者の推挙が、派閥間の衝突、さらに当時ブルジュを占領していた西ゴートの干渉により難航した。そこでブルジュ市民は、クレルモン司教シドニウスに選出を委託したのであった。シドニウスはまず、自身と同じくオーヴェルニュのネットワークに属する司教への協力を要請した。その後彼は、セナトール門閥出身で、ブルジュの代表として活動してきたシンプリキウスを候補者に擁立したのである。他方でシドニウスは、ブルジュ市民の資質を評価することも忘れなかった。一連の措置は、シドニウスが他司教の関与を重視する一方で、都市民にも配慮していることを示唆している。そのためこの事例は、規定における司教間のネットワークと都市民の権利の併存状態を裏づけていると考えられる。

次に、6世紀ガリアにおける司教選出である。この時期ガリア司教は、皇帝と教皇間で激化した権力闘争から独立した体制を築くために、カトリックを選択したフランクとの連携を選択した。他方でフランクも、ガリア支配のためには、カトリックのローマ系住民の支持は不可欠であり、教会との連携は望ましいものと判断した。こうして両者の結合が成立した結果、フランクによる聖界への干渉の機会が増大した。

その影響は、当然司教の選出にも及んだ。6世紀のトゥール司教グレゴリウスは、同世紀の司教選出の事例を報告している。それらの叙述から、フランク王の恣意により選出される司教が多数存在したことがわかる。なかには、選出に際して王の承認を求める事例もあった。

こうした状況を反映して、教会会議もフランク王により招集されるようになった。このことは、そこでとりきめられる司教選出規定にも影響を及ぼすことになる。それらの規定のなかでまず注目されるのが、都市民、聖職者、司教が関与して新たな司教候補者を選出することを示す、「古い形式の制度」という文言である。司教は、王権の介入によって、自身の存在が脅かされていることを実感していた。そこで、都市民の支持という、この時点での実効性が疑わしい伝統的な形式を用いて、都市の代表者としての自身の立場を、フランクとの差異化を図りながら提示したのではないかと考えられる。同じく重要なのが、司教選出における王権の関与を認めることを意味する、「国王の意向」という文言である。これら二つの文言が同時に現れるという現象は、都市における権力という面では王権と距離を置きながらも、ガリア教会の自立性の確保という面では王権を頼りにするほかないという、ガリア司教の複雑な状況を反映していると思われる。したがって、6世紀の司教選出規定は、情勢をふまえて自身の権力を形成するという、ガリア司教の意図を提示していると考えられる。

次に、ガリア司教の活動の基底をなした、二つの司教間ネットワークについて考察する。まず、レランス修道院を中心とした司教間ネットワークを検討する。その中心にあったのがアルル司教であり、ネットワークの盛衰に大きく影響を及ぼす存在であった。5世紀前半のアルル司教ヒラリウスは、ネットワークの最盛期を現出した。最も顕著な活動として、リエ、オランジュ、ヴェゾンでの一連の教会会議を主催したことが挙げられる。これらの会議においてヒラリウスは、出席者を着実に増大させつつ、司教選出への干渉や、諸規定の作成により、ネットワークの統一を促進した。また彼は、帝国や教皇には接近せず、他面ではガリアの俗界の有力者との関係を築いた。このようにヒラリウスは、あくまでガリア内部で完結する勢力形成を標榜して、ネットワークを拡大させた。

449年のヒラリウスの死は、ネットワークの転換点となった。ヒラリウスを継いでアルル司教となったラウエンニウスは、前任者に倣い、ガリア南部での広範な支配権の獲得をめざしたが、難航した。その間に、ナルボンヌ、マルセイユといった有力司教座の台頭、長くアルルと首都司教権を争ってきたヴィエンヌを中心とした対抗派閥の出現により、ラウエンニウスの影響力が漸次低下した。加えて、当時東方での教義論争に関与していた教皇

レオ 1 世は、正統教義にたいする西方教会の支持を得るために、ガリア教会への干渉を強めた。そうした行為の一環として、レオはアルルに加えて、ヴィエンヌ、ナルボンヌとの独自の交渉をも敢行した。このように、5 世紀後半にはアルル司教の優位が崩れ、ネットワークの動揺が明らかとなった。

5 世紀末になると、ガリア南部で西ゴートとブルグンドの間での領土争いが発生した。その影響により、首都司教管区が分断され、アルルとヴィエンヌ間の首都司教権争いがさらに激化することとなった。こうした状況下で就任したアルル司教カエサリウスは、情勢に応じて、様々な戦略をうちだした。まずカエサリウスは、506 年のアグド教会会議において、当時アルルを支配下に収めていた西ゴートに接近し、レランス=ネットワークとの協力関係を明示した。しかしこの関係は、507 年のヴィエの戦いでの西ゴートのフランクにたいする敗戦により破綻した。翌 508 年にアルルが東ゴート領となると、カエサリウスは教皇を含むイタリアとの結合へ方針を転換した。さらに彼は、かつてのヒラリウスと同様に、アルル、カルパントラ、オランジュ、ヴェゾンという 4 つの教会会議を主催した。これらの会議では、諸規定の改正や、有力司教の処断などによって、ネットワークの強化が図られた。しかし、カエサリウスはその後、フランクの台頭や、ネットワーク内の不和により、聖界の中心から退いた。そしてレランス=ネットワークも、フランク領への編入に伴い解体されることとなったのである。

他方で、オーヴェルニュ地方を中心とした司教間ネットワークの母体となった、同地域のセナートル貴族のそれは、聖職進出以前から、篡奪帝への支持、皇帝の擁立といった、独自の勢力を形成していた。そのため、司教間ネットワークも、より密接に世俗のガリア情勢と結びついていく。この地域の聖俗両面にわたる中心であり、ネットワークの動向を代表する存在であったのが、クレルモンであった。

まず注目されるのが、クレルモン司教シドニウスの活動である。471 年に、すでにガリア南西部の大半を支配下に収めていた西ゴートによるクレルモン攻囲が開始されると、就任間もないシドニウスは、同市民の抗戦を指導した。その際、彼の拠り所となったのが、オーヴェルニュのネットワークであった。具体的には、シドニウスは食糧供給、市民の精神的統一を促進する連祷の様式の借用、ブルグンドへの協力要請を、ネットワークの構成員との折衝とつうじて獲得したのである。しかし、こうしたクレルモンの抵抗にもかかわらず、475 年にオーヴェルニュの西ゴートへの割譲が決定した。その結果、抵抗の指導者としての責を問われ、シドニウスも投獄されることとなった。

シドニウスは、攻囲戦後もネットワークを重視する姿勢を変えなかった。彼は、友人であり、西ゴート宮廷に勤務していたナルボンヌのレオの協力を得て、幽閉状態から脱し、その後クレルモン司教位にも復帰した。以後は、表向きは書簡の整理や聖務に専念していたが、ガリア諸司教との文通は継続した。こうした行動は、シドニウスが何らかの勢力形成を画策していたことを想起させるものである。

その後オーヴェルニュ=ネットワークは、西ゴートを支持し、次第に勢力を拡大してい

くフランクには懐疑的姿勢を貫いた。たとえば、シドニウスの息子アポリナリスは、507年のヴィエの戦いに西ゴート側で参戦した。また、アポリナリスの息子アルカディウスも、オーヴェルニュを領有したフランク王テウデリクと対立した。さらに、511年、533年の二度にわたり行われたオルレアン教会会議では、フランクの支配が認められるものの、規定の作成や財産の処分において、聖界の独立が主張された。このようにオーヴェルニュ＝ネットワークは、フランク支配下でも維持され、ガリア情勢に影響を及ぼし続けた。

以上にみてきたような、司教たちの活動の拠点となったのは、自身の司教座教会が位置する都市であった。司教の行動にも影響を与えたと考えられる、それらの都市の発展の経過は多様なものであった。そのため、実態の把握のためには、都市および司教の個別的検討が不可欠ということになる。そうしたなかでトゥール司教は、都市の声望を高める独自の戦略を実行しており、諸司教のうち注目すべき存在といえる。

都市トゥールは、ガリアがローマの支配下に入った後の1世紀に、ガリア人の一種族であったトゥロネス族の定住地をもとに成立した。この時点ではいまだ小都市であり、地域の中心としての役割を担うにすぎなかった。その後3世紀になると、危機対応のための帝国による属州再編のなかで、トゥールの政治的重要性は増大した。そして4世紀末には、属州の細分化がさらに進み、トゥールは新設された属州第三ルグドゥネンシスの首都に選ばれたのであった。

トゥール教会については、同司教グレゴリウスによって、250年の教皇による司教カティアヌスの派遣が「起源」とされているが、これは伝説的要素が強いものであると考えられる。他方で、グレゴリウスの叙述では2代司教とされるリトリウスの在任期は、4世紀中頃であった。この時期は、ガリア諸司教座教会の黎明期にあたるため、起源としてはより信憑性の高いものであると思われる。おそらくはこの時期に、すでに存在していたトゥールの信徒集団が、教会組織へと編成されたと考えられる。

リトリウスの死後、トゥール司教位を継いだのがマルティヌスであった。この人物は、パンノニアの軍人家系の出身で、ガリアでのローマ軍勤務後、他地域での宗教生活の挫折を経て、元軍人の聖界への転向が比較的容易であったガリアで聖職に就任した。その後トゥール市民が、奇蹟をもたらす聖性に加えて、軍人としての経験と知識が同市のトゥールの保護と発展に寄与しうるマルティヌスを司教位に求めたというのが、マルティヌスのトゥール司教就任の経緯であった。

マルティヌスのトゥール司教在任期の活動は、多方面にわたるものであった。まず、トゥール司教区内での布教が挙げられる。その一環として行われた、ウィクスと呼ばれる小集落への教会建設は、トゥール司教区確立の基盤となった。またマルティヌスは、自身の司教区内のみならず、ガリア中部諸都市での布教も行い、さらにセナートル貴族の禁欲主義者や、皇帝マクシムスとの交流をもつに至った。その後マルティヌスは、ヒスパニア、ガリア南部を中心に拡大した禁欲主義運動である、プリスキリアヌス主義を標榜する人々を擁護したが、プリスキリアヌス派を排撃しようとするカトリック司教や、彼らを支持す

るマクシムスと対立することとなった。その結果、彼は孤立し、以後ガリア情勢からは遠ざかった。そして、マルティヌスへの評価は、当人の死亡に伴い消失してしまい、トゥールの地位上昇に即座には寄与しなかった。

5世紀後半になると、ガリアは西ローマ、西ゴート、フランクといった、諸勢力の並立状態へと向かった。また聖界では、レランス＝ネットワークがヒラリウス死後の混乱期に入り、聖界でのアルルの優位が崩れるという状況にあった。こうしたなか、トゥール司教の座にはセナトル門閥の出身者が順次就任した。彼らは様々な側面から「権威」を構築し、目下の危機に対応しながら、ガリア聖界での浮上をもめざした。

まず、ローマ上位層のネットワークに基づく「権威」が挙げられる。この時期のトゥールは、上述の諸勢力間の対立の只中であつた。オーヴェルニュ＝ネットワークの一員であつたトゥール司教は、都市を守るための方策として、周辺司教との関係を重視した。たとえば、トゥール司教ウォルシアヌスは、西ゴート接近の危機に際して、ネットワークの構成員であり、おそらくは縁者でもあつたリモージュ司教ルリキウスに保護を求めた。このようにしてトゥール司教は、ネットワークへの所属、およびその活用を、「権威」として提示しようとしたと考えられる。

次に、首都司教座としての「権威」が挙げられる。トゥール司教は、教会組織上は管区の首都司教であり、管轄下の司教たちを統率する立場にあつた。この役割を果たすために、彼らはアンジェー、トゥール、ヴァンヌといった一連の教会会議を主催した。そこでトゥール司教は、管区を中心に広く出席司教を募り、広い人脈を示した。また諸規定により、管区の統一を標榜した。こうしてトゥール司教は、統率された首都司教管区の長たることを「権威」とすることをめざしたと考えられる。

そして、マルティヌス信仰による「権威」が挙げられる。前述のマルティヌスの同時代人であるスルピキウスは、ガリア南西部アクィタニアの有力家系出身で、禁欲的生活を實踐していた。彼は自身の著作において、マルティヌスを、自身の模範たる「禁欲主義者」、またトゥールを離れて活動する「広域的な聖人」として描写したのであつた。時代が下り、5世紀後半のトゥール司教ペルペトゥウスは、こうしたスルピキウス式のマルティヌス像を、「トゥールの聖人」としてのそれに置き換える活動を展開した。具体的には、聖マルティヌス・バシリカの建築や、ペリゲーのパウリヌスなる人物への、新たな『マルティヌス伝』の作成依頼が挙げられる。こうした生み出されたマルティヌスの聖性が、信仰の拠点であるトゥール、および同司教の「権威」の根拠となつたと思われる。

5世紀末になると、勢力を拡大していたフランクの拠点である属州第二ベルギカ、教会組織上のランス首都司教管区の浮上が明らかとなつた。これを背景に、この管区の首座であるランス司教レミギウスは、フランクとの連携による権力形成を志向した。そのことがよく表れているのが、フランク王クローヴィスに宛てられたレミギウスの書簡である。そこでレミギウスは、この王が、「属州」を支配するという意味で皇帝の継承者であると同時に、教会の保護者であるべきことを提示している。これは他方で、その「属州」、すなわち首都

司教管区の長である自身が、他に先んじてフランク王と結びついていることを聖界に宣言するものともなっていると考えられる。その後レミギウスは、クローヴィスのカトリック改宗を司り、ガリア聖界での優位を確実にした。

同時期のトゥール司教も、都市が西ゴートの支配下に置かれるなかで、フランクとの関係を模索した。そのきっかけとなったのが、クローヴィスがマルティヌスの墓を訪問し、改宗を決意したことであった。これによりトゥールは、西ゴート支配下のガリア都市のなかではいち早く、フランクとの関係を築くこととなった。トゥール司教リキニウスは、ヴィエの戦いに向かうフランク軍に、マルティヌスの名の下に戦勝を約した。また、その戦いの後に、聖マルティヌス・バシリカにおけるクローヴィスの執政官就任式や、バシリカとトゥール教会の間での同王の凱旋式を計画した。このようにトゥール司教は、マルティヌス信仰を媒介にフランクに接近し、ガリアでの地位上昇を画策したと考えられる。

その後トゥールは、クローヴィス死後のフランク諸王による分割統治や、彼らの間での領土争いの影響を被り、停滞期に入った。この状況を打開しようとしたのが、6世紀後半のトゥール司教グレゴリウスである。この人物は、父母ともにオーヴェルニュ＝ネットワークに属する、トゥール司教座にも人材を供給した家系の出身であった。こうした背景のもとに、グレゴリウスは、聖俗の諸活動により地位の構築を図った。

グレゴリオスのトゥール司教就任以前から、トゥールはアウストラシア、ネウストリア、ブルグンドと呼ばれる、3つのフランク分王国の争奪の対象となっていた。またトゥール教会は、それらの王と対立し、保護を求めてやって来る王家の者や有力者を受け入れていた。こうしたなかでグレゴリウスは、自身のトゥール司教就任の承認を受けるなど、関係の深いアウストラシアへの帰属を求めながらも、情勢に応じていずれの分王国を支持するかを慎重に判断していた。他方で、上述のようなトゥール教会に逃避してきた要人の処遇をめぐり、フランク王と交渉を重ねた。これらの活動を経て、彼はフランク王国内での地位を築いていった。

グレゴリオスの活動は、当然トゥールの内部でもなされた。585年から588年にかけて、トゥールの有力者であるシカルおよびクラムネシンドの党派間での闘争が勃発した。仲裁に立ったグレゴリウスは、教会の財産を抛出して騒動を鎮めようとした。この騒動自体は終結したが、その結果復讐の機会を奪われたシカル党派のグレゴリウスにたいする怨恨は深いものであった。そのため翌589年、彼らの働きかけで、アウストラシア役人によるトゥールへの新規課税の試みがなされることとなった。これにたいしてグレゴリウスは、トゥールが歴代フランク王のマルティヌスへの尊敬によって、これまで課税を免除されてきたことを主張し、この危機を免れた。ここでいう「課税免除」とは、免除特権の受益者が徴収自体は実施するものの、国庫への納入が免除されるというものであった。したがって、徴収された税が、免除特権の受益者に流入することになるのである。この点を考慮すると、グレゴリオスの主張には、自身への怨恨のみならず、本来国庫に収められる税収が、実はトゥール教会の利益となっているという事実を隠すという目的があったと考えられる。こ

うしたトゥール内部での一連の事件は、トゥール司教による、経済面からの権力形成を示す事例であると考えられる。

そして、やはりグレゴリウスもマルティヌス信仰の問題に着手した。6世紀ガリアにおいては、有力な聖人が多数存在しており、トゥール以外でのマルティヌス信仰の事例は少数であった。こうした状況のなか、グレゴリウスは、マルティヌス信仰普及のための新たなイメージを創出した。一つは、「至福のマルティヌスの座」としてのトゥール司教座というものである。グレゴリウスは著作において、司教を評価する基準を敬虔さに求めた。そのうえで彼は、歴代トゥール司教にたいしては、マルティヌスの後継者であることを根拠に、その敬虔さを保証した。このようにグレゴリウスは、トゥール司教とマルティヌスの関係、およびその聖性を強調することで、他のガリア司教たちに対抗し、聖界において優位を築こうとしたと考えられる。いま一つは、「フランク＝ガリアの聖人」としてのマルティヌス像である。前述のとおり、グレゴリウスはフランク王国の助言者としての地位を築いていたため、自身の正当性を示す必要があった。そこでグレゴリウスは、フランクの起源をマルティヌスと同じパンノニアと措定した。これによってマルティヌスは、ガリアの聖人たちのなかでも、フランクにとって重要な存在となる。こうしてグレゴリウスは、「フランク＝ガリアの聖人」としてのマルティヌス像の普及に伴うトゥール司教座、および自身の声望を、権力の一端となすことを狙ったと考えられる。

以上の検討から、5・6世紀のガリア司教は、自身の置かれた状況を見きわめ、戦略的に権力の構築を図ったことがうかがわれる。こうした司教の動向は、諸勢力の分立状態にあった5・6世紀のガリアにおいて、いかにして自身の基盤を成立させるかという、聖俗の別なく行われていた試みの一環として解釈すべきものであると思われる。

こうした5・6世紀ガリア司教の動向と、古代から中世への移行との関係を考えると、「ローマ」の継受という問題が現れる。元来その担い手であった帝国政府が漸次弱体化するなか、「ローマ」を継承したのが、キリスト教会、およびその指導者たる司教であった。5世紀ガリアにおいては、セナトール家系出身の司教たちを中心に、自身の権力構築にあたって「ローマ」を活用するという事態がみられた。この際「ローマ」は、「都市の要人」「聖界の指導者」「聖人信仰の統率者」などとともに、ガリア司教を構成する主要な要素となったと考えられる。続く6世紀ガリアにおいても、フランク王権が、相対的多数のローマ系の人々との関係を築くためには、「ローマ」の需要がやはり重要な問題であった。そこでフランクは、相互の連携によってガリアの広範な地域を包摂しており、なにより先んじて「ローマ」を自身の支配者像に組みこんでいた司教たちを参照し、「ローマ」の理解に努めたのである。そしてフランク諸王は、それを自身の統治に活用していったと考えられる。

このように考えると、ガリア司教は帝国とフランク王権の中間に位置し、「ローマ」の継承に密接に関与していたといえよう。そして、各々の場面で現れる「ローマ」は、それを運用する主体の置かれた状況に応じて変化すると考えられる。そのような性質をもつ「ローマ」と、さまざまな情勢や関係のなかで対峙し続けることを求められるガリア司教の研



究は、古代から中世への移行期と称される時代の諸段階にたいするより詳細な検討を加えていくうえで、重要な手がかりを提供するものとなると考えられる。